

フッサールの享受論

鈴木 崇志

はじめに

エトムント・フッサール（一八五九―一九三八）の現象学においては、表象、知覚、判断、空想、他者経験などのさまざまな志向的体験がテーマとなり、それらの特徴や役割が論じられている。だが、フッサールがそのような志向的体験の一種として「享受（Genießen）」を取り上げていたことは、それに関するテキストが彼の生前には公にされなかつたという理由もあり、あまり知られていないだろう。しかし公刊に向けて準備されていた『イデーⅡ』や、現在『フッサール全集』に収録されている幾つかの草稿においては、「享受」への立ち入った言及を見出すことができる。その内容は、後述するように「価値覚」や「衝動」の概念と関わっており、フッサール研究の枠内に限っても興味深いものである。さらにそれは、より広い現象学研究の文脈でも意義をもつはずだ。「享受」概念を重視した現象学者としてはエマニュエル・レヴィナス（一九〇六―九五）が有名であるが、レヴィナスの享受論が何を成し遂げたかを考えるためにも、それに先行するフッサールの享受論を再構成しておくことは重要だろう。ではフッサール自身は、「享受」についてどのような考えをもち、それを自らの現象学のうちにとどのよう位置づけていたのだろうか。本稿ではこの問いに答えるために、以下の順序で論述を進めていく。

まず第一節では、『イデーⅡ』における「享受」概念の位置づけを明らかにする。同書では価値判断や動機づけをめぐる議論との関連で、かなりまとまったかたちでの享受論が提示されているため、その概要を確かめておくことは有益であるはずだ。次に第二節では、『イデーⅡ』で提示された実践的な場面での「享受」が、「衝動（Triebe）」をめぐる考察のなかでどのように掘り下げられているかを、具体例に即して調べていく。最後に第三節では、以上を踏まえて再構成されたフッサールの享受論の特色を、レヴィナスの享受論と対比することによって際立たせてみたい。

一 『イデーⅡ』における「享受」概念の位置づけ

一・一 享受と価値判断

一九一二年から一五年にかけて執筆された『イデーⅡ』第四節において、フッサールは「理論的主観（theoretisches Subjekt）」の説明を行っている（*Hua*. IV, 4）。それによると、理論的主観とは「特別な意味で『客観化』する主観」のことであるとされる。より詳しく言うと、理論的主観とは、志向的対象を自らにとつての客観として漠然と思ひ浮かべるだけでなく、その存在を「定立し」、かつその内容を

「解明することを通じて」「述定的に判断のかたちで規定する」者である (Hua. IV. 4)。そしてそのような定立・解明・述定によって特徴づけられる志向的体験は、「理論的作用」と呼ばれる (Hua. IV. 4)。

しかし主観は、たえまなく理論的作用を遂行しつづけているわけではない。例えば「輝く青空を見ながら、それに魅了されて生きている (den strahlend blauen Himmel sehend, im Entzücken darüber leben)」という例に即して考えてみよう (Hua. IV. 8)。このとき主観は、対象について「青い空である」と明示的に判断することすらなく、それに見惚れることができるだろう。しかし主観が物理学者の視点で青い空を観察しているときには、たとえ青い空についての「好ましいという気持ちがある (das Gefallen vorhanden sein)」としても、その主観は「好ましいという気持ちのうちで生きている (im Gefallen leben)」わけではなく (Hua. IV. 8)。好ましいという気持ちそれ自体を打ち消すことはできないかもしれないが、それに浸ることをやめて対象についての判断を下そうとするとき、主観は「理論的態度」へと移行するのである (Hua. IV. 8)。その一方で、あくまで好ましいという気持ちのうちで生きているとき、主観は「心情的態度」をとっていると考えられる (Hua. IV. 8)。

フッサールの「享受」概念が登場するのは、この文脈においてである。前段では心情的態度の一例として、青空を見ながら「好ましいという気持ちのうちで生きている」という状態が記述されていた。つづけてフッサールは、さらに心情的態度を説明するために、一枚の絵面を『享受しながら』眺めている (‘genießend’ betrachten)」という例を挙げている (Hua. IV. 8)。これらが同種の心情的態度（知覚にもとづいて対象を肯定的に評価する態度）に属しているとすれば、「享受している」ということは、さしあたり「好ましいという気持ちのうち

で生きている」と言い換えられるだろう。理論的態度との対比において説明されていたように、ここで重要なのは、享受が「……のうちで生きる」という要素を含んでいるということだ。私たちが何かを判断するときには、その対象についての心情から多かれ少なかれ距離を置いたうえで、いわば醒めた頭で対象について思考することになる。これに対して享受においては、私たちはそのつど与えられる対象についての心情に浸りきって、いわば対象に見惚れたり聞き惚れたりすることになる。したがって享受において主観は、自らの心情のうちに——あるいはそのうちで与えられた対象に——「没頭 (Hingabe)」していると考えられる (Hua. IV. 9)。享受とは、醒めない頭で生きることなのである。

このように享受は、理論的態度未満の志向的体験である。ただしそれは、単に明晰でないという消極的な状態だけにとどまるわけではない。むしろそこには、価値判断を支えるという積極的な役割があるとされる。

最も根源的な価値構成は、心情において、情感的な自我主観が理論以前の状態で（広い意味で）享受しながら没頭することとして行われる。そしてこのような没頭のことを、私はすでに十数年前から講義の中では価値覚という言葉で表現してきた。(Hua. IV. 9)

理論的態度においては、事実判断だけでなく価値判断が下されることもある。そして事実判断（例…この絵には白い花が描かれている）の根拠が知覚 (Wahrnehmung) であるのと同様に、価値判断（例…この絵は美しい）にも何らかの根拠があるはずである。フッサールによれば、その根拠は、主観がその絵を好ましいと思う気持ち——より正確

に言えば、その気持ちから距離を置くことなくその気持ち（あるいはそこで与えられる事物）を享受しつつ没頭している状態——にはかならない。そしてそのような没頭状態が、右の引用では、価値覚 (Wertnehmung) と呼ばれている。理論的作用は、事実判断を下しているときには知覚によって充実され、価値判断を下しているときには価値覚によって充実されるのである。

価値判断と価値覚の関係から明らかになったように、理論的態度と心情的態度は一方が他方を否定するような対立的な関係ではなく、むしろ互いを支えあうような相補的な関係にある。心情的態度のもとの享受において漠然と感じられていた事柄は、理論的態度のもとでの価値判断において解明される。その一方で、価値判断において対象に述語づけられている価値は、享受しながらの没頭 (価値覚) において生き生きと与えられる。したがって「享受」概念は、さしあたり、理論的作用の一種である価値判断を根拠づけるといふ役割を果たしていると言えよう。

一・一・二 実践としての享受

他方で『イデーニ』第五〇節においては、理論的作用ではなく実践的作用との関連において「享受」概念への言及がなされている。ここでは主観が、自らの環境世界と関わりながら生活している「人格」として捉えられている (Hua. IV, 185)。

人格と環境世界との関係は、単に物理的な刺激を受け取って生理的に反応するという意味での因果関係だけにとどまらない。人格は環境世界において出会われる事物に対して、習慣や状況に応じてさまざまな欲求を抱き、何らかの仕方に対象へと働きかけるように動機づけ

られる。このとき人格と環境世界のあいだには、「動機づけ関係 (Motivationsbeziehung)」があるとされる (Hua. IV, 189)。そしてこの動機づけ関係が成立する仕組みは、次のように説明される。

現象学的に言えば各事物統一 (ノエマ的統一) が、多かれ少なかれ「強い」諸傾向の出発点である。意識されてはいるが、しかしまだ把握されていない (意識の背景で揺らめいている) 状態ですでに、それらの統一体は主観をそれら自身のほうへ引きつけ、そして「刺激の強さ」が十分になれば自我はその刺激に「従い」、それに「屈して」そちらへ向かい、そしてそれらの統一体について、解明・概念化・理論的判断・評価などの実践的な諸活動を行うのである。それらの事物統一はこうして、それらが存在していることや、例えば美しさや快適さや有用性などの性質を持つていることによって主観の関心を引きつけ、そしてそれらを享受したい、それらで遊びたい、それらを手段として利用したい、用途を考えて改造したい、などという主観の欲求を喚起するのである。(Hua. IV, 189)

現象学のキーワードである志向 (Intention) は主観から対象へと発せられるものだが、この引用においては、その発生を説明するために、対象の側から一定の「傾向 (Tendenz)」が発しているという主張がなされている。その際、対象はまだ明示的に志向の対象になっていないという意味で「意識の背景」にあるかもしれない。しかしそうした状況において、対象の側は主観に刺激を与え、それによって主観を「引きつける (ziehen)」。そしてこの刺激による引きつけの強さが十分な程度に達すると、主観はそちらに向かい、諸々の志向的体験を遂行す

ることになる。したがって志向的体験は、対象から主観へと向かう傾向によって喚起されて生じる、主観から対象へと向かう傾向であるとも言えるだろう。このように主観から対象へと向かう志向的体験は、対象から発せられた傾向がいわば折り返されることで成立する。主観が完全な主導権を握っていることは、あつたとしてもごく稀である。むしろ多くの志向的体験は、対象による刺激に主観が「従う(folgen)」¹⁾とや、「屈する(nachgeben)」²⁾ことよって成立するのである。

そしてフッサールは右の引用の直後で、このような人格的あるいは動機づけの態度を「実践的態度」と言い換えている(Hua. IV, 190)。したがって引用文中で述べられているように、理論的判断を含めたあらゆる活動は、環境世界との動機づけ関係に即して捉えられるかぎり³⁾で、すべて「実践的活動(praktische Tätigkeit)」と呼ばれるのである⁴⁾。

特筆すべきは、右の引用において、「享受すること(genießen)」がそのような実践的活動の一種として挙げられているということだ。対象が主観を引きつける仕方はさまざまでありうる。例えば理論的判断の対象となるべきものは主観の知的好奇心を引きつけ、目覚まし時計のけたたましい音は主観の注意を否定なく引きつけるだろう。そして享受が主観を引きつける仕方は、二・一で引用した『イデーⅡ』第四節においては、「魅了(Entzücken)」という言葉で表現されていた(Hua. IV, 8)。つまり対象が魅了という仕方で主観を引きつけるのに応じて、主観はそれを享受したいという欲求を抱くのである。

ここまでで分かったことを一旦まとめておこう。『イデーⅡ』において「享受」概念は、第一に価値判断を根拠づけるものとして位置

づけられ(一・一節)、第二に対象からの刺激によって喚起される実践的活動の一種として位置づけられている(一・二節)。第一の側面に注目するならば、享受は自らの心情やその対象に浸りきって生きている状態、すなわち理論的作用未満の状態として説明される。他方で第二の側面に注目するならば、享受は、対象から及ぼされる傾向に応えることで生じる傾向として、すでに対象に向かっている志向的体験として説明される。つまり同書でのフッサールの見解によれば、享受とは志向的体験以上、理論的作用未満のものなのである。

二 衝動と享受

二・一 衝動の構造

前節で述べたように、享受とは、そこにおいて価値が根源的に与えられるような体験であるがゆえに、価値判断を根拠づけることができる。他方で享受は、価値判断との関わりを抜きにしてもそれ自体が実践的活動であるされていた。その際に念頭に置かれていたのは、何かに魅了されるという仕方で対象に引きつけられ、そこに向かうという活動である。つまりその場合には、例えばすでに頭上に青空が広がっているときのように、はじめから享受すべき対象が与えられているという状況が想定されていたのである。しかし当然のことながら、さしあたりは享受すべき対象が与えられていないという場合もありうる。すると享受が実践的活動であることは確かであるとしても、与えられたものの享受に先立つ、与えられるべきものの獲得へと向かう実践的活動をも顧慮すべきではないか。

ただし『イデーⅡ』における享受についての散発的な論述だけで

は、この疑問に十分に答えることは難しい。そこで本節では、『イデーニ』と同時期、あるいはより後年になってフツサールが執筆したテキストにも目を向けて、享受と他の実践的活動との関連について探ってみたい。そのために主に参照されるのは、『フツサール全集』第四二巻『現象学の限界問題』所収のテキスト群「衝動の現象学」である。

特に本節で取り上げるのは、『イデーニ』(一九二二―一九二五年)より少し後の一九一六―一八年に執筆された、「本能的な行い (Instinktives Tun)」と題された草稿 (Husserliana, Bd. XLII, Text Nr. 5) である。そこでもやはり「享受 (Genießen)」が論じられているが、その際に念頭に置かれているのは、享受一般というより、むしろ享受という体験の最も直截的な形態、すなわち何かを「味わうこと (Genießen)」である。

まずは基本的な言葉づかいの確認をしておこう。同草稿における主観の扱いは、基本的には『イデーニ』と同様である。つまりここでも、主観が単なる理論的認識の遂行者であるだけでなく、さまざまな実践的活動の遂行者でもあることが顧慮されているのである。そのうえでフツサールは、そうした実践的活動の出発点には、衝動があるのだと主張する。ここで彼が「衝動 (Triebe)」と呼んでいるもののなかには、本能的な (instinktiv) ものと獲得された (erworben) ものの両方が含まれている (Hua. XLII, 84)。本能的な衝動としては、「空腹を満たすこと」や「性行為」などの実践へと向かうような衝動 (Hua. XLII, 85)、すなわち食欲や性欲が挙げられている。他方で獲得された衝動としては、「自然の中で歩き回ること」や「ピアノを弾くこと」などの実践へと向かうような衝動が挙げられている (Hua. XLII, 84)。たしかにそれらの衝動は、散歩に行ったり楽器を演奏したりする習慣

があつて初めて生じるものだろう。そのように広い意味で「衝動」という語を用いるのであれば、すべての実践的活動の根底には衝動があると断言しても過言ではない。私のなすことには、そうするように私を衝き動かす何かが行先している。さしあたりは「何か」と呼ぶしかないような未規定なもの——「それが私を活動へと衝き動かすのである (Es treibt mich zur Arbeit)」(Hua. XLII, 84)。

今しがた取り出された「私が私を活動へと衝き動かす」という構造を手がかりとして、さらに読解を進めてみよう。この構造をなしている諸要素は、①衝き動かすを行う「それ (es)」、②それが行う「衝き動かす」という働き (treiben)、③それによつて衝き動かされる「私 (ich)」、④衝き動かされた私が行う「活動 (Arbeits)」の四つである。では、これらの四要素はどのように組み合わせられているのだろうか。フツサールの説明は左記のとおりである。

「〔…〕私は衝動 (例えば自然の中で歩き回りたいという衝動や、ピアノが弾きたいという衝動など) が湧き起こっているのを感じる。このとき、ピアノを弾くことについての明晰な表象は欠けているかもしれない。だが、表象そのものが全く直観的ではないとしても、表象は自らのうちに規定性を隠し持っている。現実にはピアノがあるところまで行かなくても、私は「自分が本当にしたかったのは何か」「自分は何について考えていたのか」と自問することができる。私は、不明晰さを明晰さへと移行させることができる。明晰なものは、以前には非直観的に思念されていたものについての直観的な表象として与えられる。(Hua. XLII, 84)

先述の四つの要素に即して、ここでのフツサールの論述をまとめ直

してみよう。

① 「それ」について

私を衝き動かす「それ」とは、端的に言えば「表象 (Vorstellung)」である。たしかに衝動を抱いているときに目標が実在しているとはかぎらないので、私を衝き動かしているのは、対応するものが現実世界に存在しているようにいまいと私の意識流の中にあるものだろう。そのように私によって思い浮かべられたものを、フッサールは「表象」と呼ぶ。特筆すべきは、衝動の始点となる表象は「全く直観的ではない」ことがありうるということだ。居ても立ってもいられなくなるとき、私は、何をすれば自分の気が鎮まるのか初めは分からないかもしれない。

② 「衝き動かし」について

たとえ未規定であるとしても何らかの表象が意識流のうちにあるとき、場合によってはそれが私を衝き動かす。この衝き動かしが無意識のうちになされる可能性は排除されていないが、さしあたり引用文中で想定されているのは、私がこの衝き動かしを「感じる」という状況である。

③ 「私」について

ここで言う「私」とは、何らかの表象を思い浮かべ、それによる衝き動かしを感じ、この衝き動かしによって活動へと促される主体である。さらに言えば、この私は空虚な極のようなものではなく、むしろ習慣や趣味の担い手として、具体的内容をもった主体であると考えられる。じっとしていることに耐えがなくなったときに「自然の中を歩

き回りたい」と思うか「ピアノが弾きたい」と思うかは、習慣や趣味に応じて、まさに人それぞれだからだ。

さらにフッサールは、そのような習慣や趣味が食欲に及ぼす影響にも言及している。何かを食べることは、初めはただ食欲を満たすためだけに行われるかもしれないが、習慣や趣味の発達に応じて、特定の「味 (Geschmack)」への衝動が獲得されることもありうる (Hua. XLII, 88)。空腹を満たしたいという衝動は本能的だが、特定の味や料理への衝動は生活習慣のなかで獲得されていく。何にどのように衝き動かされるかは、私の成長や経験に応じて変動するのである。

④ 「活動」について

表象によって衝き動かされた私は、さまざまな活動へと身を投じることになる。このように、衝動が単に「感じられる」だけにとどまらず活動へとつながりうるという意味で、衝動には「実践的」という形容詞が付けられることもある (Hua. XLII, 84)。そして相応しい活動がなされるとき、衝動は充実されるに至るだろう。衝動の出発点となった表象の内容が解明されることは、衝動の充実の必要条件でも十分条件でもない。自分を衝き動かしていたのがピアノの表象であることに気づいたからといって、実際にピアノが弾ける環境にしなければ衝動は満たされないままである。また場合によっては、たまたまピアノを弾いたあとで初めて、自分がしたことが「それ」であったことに気づくこともあるかもしれない。衝動は何かに向かっているという意味では一種の志向であるが、衝動の志向を充実するのは単なる知覚ではない。したがって、それが活動あるいは活動の成果によってどのように充実されるかという問題が、衝動の現象学における重要な論点の一つとなる。ナミン・リーが指摘するように²⁾、このような衝動の充

実の問題に踏み込むようになったことは、フッサールの後期哲学の一つの特徴である。

二・二一 味わうこととしての享受

衝動の志向を充実するのは何か——前段で提起したこの問題には、少なくとも形式的にはすでに答えが与えられている。衝動は本能的なものであれ獲得されたものであれ、何かがしたいという欲求というかたちで意識される。そして欲求は当人にとって価値あるものに向かうが、価値がありありと与えられるという体験は、『イデーⅡ』では「享受」と呼ばれていた。したがって衝動を充実するのは、端的に言えば、享受なのである。

とはいえ、そこで生じる享受がどんな体験であるのかを詳しく説明しないかぎり、衝動志向の充実をめぐる問題に実質的に答えたことにはならないだろう。その手がかりを得るために、同草稿でのフッサールの記述をさらに追っていききたい。

これまで論じられてきた本能的な衝動と獲得された衝動は、一つの実践のなかで絡み合っていることがある。そのような絡み合いについて、フッサールは、食事を例にとつて考察している。空腹を満たしたいという衝動はそれ自体では本能的なものだが、それが繰り返され満たされていくなかで、やがて特定の味が私の気に入ることがある。そのようにして獲得された好みの味への衝動は、空腹を満たしたいという本能的衝動と並存しうるが、ときには両者のあいだに差異が生じることもあるだろう。

私は空腹でありうるが、この味の料理を食べることによって私は

満腹になる。そしてこの味は私の気に入り、それ自体において価値をもつ。私はこの味への切望をもつことがありうるが、私は満腹である。そして私は料理を食べ、この切望が満たされる。しかしそのような満足は、満腹感なしに、あるいは、ひよつとすると、気持ちを乱すような不快な食べ過ぎという仕方で起こるかもしれない。(Hua. XLII 86)

空腹を満たしたいという欲求と特定の料理が食べたいという欲求が、いつでも調和するとはかぎらない。ときに私は、空腹を満たすことよりも特定の料理を食べることを優先するかもしれないし、あるいは空腹が満たされた上でもなお特定の料理を食べ続けたいと思うかもしれない。そのような特定の味への「切望 (Sehnsucht)」——不快を伴うことが分かっているにもかかわらずできないような切実な欲求——も、ただ飢えを満たしたいという差し迫った食欲も、どちらも私たちが衝き動かす衝動の発露である。衝動は、必ずしも選り好みをしていない闇雲なものであるとはかぎらない。だからこそ私たちは、選り好みをした結果として気持ちを乱すような「不快な食べ過ぎ (die unlustige Übersättigung)」に悩まされることもある。重要なのは、不快であるにもかかわらず、ここではたしかに獲得された衝動が充実しているということである。

もし仮に感覚的な快・不快を数値化できるのだとしたら、満腹の限度を超えて好物を食べつづける過程で、いつか不快の大きさが快の大きさを上回る時がくるだろう。それにもかかわらず、好物への切望は充実することがありうる。だとすれば、切望というかたちをとった衝動を充実するということは、単に快を感じることはない。そこで衝動の充実を説明するための概念として、「快」に代わって「享受」

への言及がなされることになる。

料理を、まさにその内容をもった味覚欲望の目標として表象することは、おなじみの仕方で私の気に入る何か、そして私が今ふたび享受したい〔*genießen möchten*〕何かを表象することである。

(*Hua.* XLII, 86)

ここでは食事の例が挙げられているため、*genießen*を「享受する」ではなく「味わう」と訳してもよいだろう。享受すること（味わうこと）は快と部分的には重なり合うが完全に一致するわけではない。たとえ快さが確約されていないとしても、私はとにかくそれを味わいたいのである。

ところで本稿第一節では、『イデーⅡ』において「享受」を説明する文脈で「屈すること (*nachgeben*)」や「没頭すること (*hingeben*)」という語が用いられていることを確認していた。これらの語は、実は目下の草稿においても登場している (*Hua.* XLII, 87)。料理を味わうということは、単に味覚を感じることだけでは説明し尽くせない。感じられた味覚が私を魅了し、その魅了に屈してそこに没頭するときには、私はそれを享受する（味わう）。私の屈伏の程度が強いときには、享受に伴う不快（食べ過ぎによる胸のむかつきや腹の苦しさなど）も、そこでの体験を価値判断へと高めようという理論的関心も、私を享受の対象から引き離すことはできないだろう。このように、味覚を感じることも快を感じることも還元できない独自の体験を表わすために、享受という語が用いられているのである。

三 むずびにかえて——レヴィナスの享受論との比較

冒頭で述べたように、本稿の目的は「フッサール自身が「享受」についてどのような考えをもち、それを自らの現象学のうちにどのような位置づけていたのか」という問いに答えることであった。そして本稿は、主として一九一〇年代のフッサールのテキストを典拠として彼の享受論を再構成することを通じて、この問いに取り組んできた。それにより判明したことは、まず『イデーⅡ』（一九二一―二五）において、「享受」が理論と実践の両側面から論じられているということであった（本稿第一節）。理論的側面に関して言えば、享受はそこにおいて価値が根源的に与えられる体験として説明され、それが価値判断を根拠づけるという役割を果たすとされる。他方で実践的側面に関して言えば、享受は、主観が対象に「魅了」という仕方で行きつけられることから始まる実践的活動の目的として説明される。このとき享受は、対象からの魅了によって動機づけられた主観の欲求を充実するという役割を果たすとされる。そこで次に本稿は、一九一六―一八年に執筆された草稿「本能的な行い」に即して、この充実に関するフッサールの立場を示した（本稿第二節）。同草稿によれば、何かが欲しい・したいという欲求は、ときとして漠然としたものでもありうるような何らかの表象からの衝き動かしによって生じる「衝動」にはかならない。そしてこうした衝動・欲求においては、それが向かう先にあるものが当人にとって価値あるものとされる。その価値が与えられる体験としての享受は、知覚や快の感覚から区別される独自の体験である。その独自さは料理を味わうという事例に即して説明されたが、同様の説明は他の事例にも当てはまるだろう。味わうこと、見惚れること、聞き惚れること、香りや触り心地に魅了されること——フッサール

ルの享受論の意義は、こうした経験を理論と実践の両面から記述するための理論として、彼の現象学のなかに位置づけられるだろう。ひとまず本稿で確認できたのは彼の享受論の初期形態であるため、その一九二〇年代・三〇年代における展開をたどることは今後の課題としてい。

最後に、本稿で再構成できたかぎりでのフッサールの享受論をレヴィナスのそれと対比してみたい。というのも、周知のとおり「享受 (jouissance)」はレヴィナスの現象学のキーワードであるため、両者を見比べることで、フッサールの享受論をより広い文脈において評価できると考えられるからだ。

レヴィナスの享受論としては、さしあたり彼の第一の名著である『全体性と無限』(一九六二) 第二部を参照してみよう。³⁾そこでのレヴィナスの主張は、大きく分けて以下の三つの点でフッサールと対立している。

① 享受と表象の関係

第一の対立点は、享受が表象に基づいているか否かという点である。「享受」概念が導入される『全体性と無限』第二部A2は、次のような文章から始まる。

私たちは「おいしいスープ」、空気、陽光、見世物、労働、想念、睡眠、等々によって生きている。これらは表象の対象ではない。私たちは、これらによって生きているからだ。⁴⁾

ここでレヴィナスは、「享受」を「…によって生きる (vivre de…)」
と言い換え、さらにその内容をなす空気や陽光などが「表象の対象」

ではないと主張している。その理由は、同書におけるレヴィナスが、フッサールの「表象」概念を、基本的には「客観化作用 (l'acte objectivant)」という意味で理解しているからだ。⁵⁾実際のところ『論理学研究』(一九〇〇/〇一)でのフッサールの見解によれば、表象は客観化作用の典型として、つまり何かを理論的探究のための対象(客観)とする作用の一種であるとされていた。⁶⁾だとすれば、享受の根底に表象があると主張することは、享受を理論的志向性に従属させることになる。そのような見方に対してレヴィナスは、享受が理論にも実践にも先立つ「私の生を満たすありとあらゆる内実についての究極的な意識」であると主張したのだ。⁷⁾

ただし本稿第二節で見たように、享受について論じるときのフッサールは、その根底にある表象を、理論的志向性の始端と見なしていたわけではない。むしろ表象は、主観を衝き動かす「それ(ça)」の正体として導入されたものであった。とはいえたしかに、そのように未規定な何ものかを本当に表象と見なす必要があるのかという点には疑問も残る。その一方でレヴィナスの場合には、表象を初めとしたいかなる客観化作用の対象でもないような享受の対象は、いかなる権利で「対象(客観)」⁸⁾と呼ばれうるのかという問題が出てくるだろう。また、特定の料理を強く欲するときのように、享受の対象がときに特定されることもあるという事態を説明できるという点では、フッサールの説明にもそれなりの理があるようにも思われる。享受という体験は何かに向かっているという意味で志向性を持つと考えられるが、それが向かう先にあるものに関して、フッサールとレヴィナスのどちらの説明が適切であったかについては議論の余地がある。

② 享受の範囲

第二の対立点は、享受が生の全面に及ぶか否かという点である。先述のようにレヴィナスにおいては、「生を満たすありとあらゆる内実」が享受の対象となる。そこで享受されるものは、パンや空気などの外的なものに限られない。それらは生を養う糧として享受の対象になるが、彼によれば、それらを獲得するための自分の活動もまた享受の対象となる。

糧との関わりのうちには、対象との関わりがある一方で、同じく生を養い、生を満たすものであるこの関わりとの関わりが同時に存在する〔…〕。行為がみずからの活動性そのものを糧にするこの仕方が、まさに享受である。⁹⁾

こうしてレヴィナスにおいては、外的なものであれそれを得るための活動であれ、生を織りなすすべてのものが享受される。これに対してフッサールの場合、享受はあくまで私の「気に入る」ものによってのみ達成される体験であった。フッサールの想定している享受は知覚と並列されるものであって、あくまで生の特定の場面で特定の志向を充実する働きにすぎない。

ただし本稿第二節で検討した「本能的な行い」草稿においては、「生のプロセスとは、間断なく衝き動かされていることである」(Hua. XI, 108)等の発言が見いだされる。したがってこの時期のフッサールが、衝動(およびその充実としての享受)を、可能なかぎり広い意味で理解しようとしていたことは事実である。さらに後年にフッサールは、リンゴを食べるという活動に関して、リンゴだけでなく、食べること(噛みちぎり、噛み砕き、咀嚼していくこと)も享受の対象と

なる可能性を示唆している(vgl. Hua. XII, 94)。そのように享受を衝動との関連で幅広く捉えようとする姿勢、および活動そのものが享受の対象となるという発想に関して言えば、実はフッサールとレヴィナスの距離は見かけほど遠くないのかもしれない。

③ 享受論をどのように展開するか

ただし別のところに目を転じるなら、依然としてフッサールとレヴィナスのあいだには無視できない隔りがある。それが彼らの第三の対立点、すなわち享受論をどのような方向に展開するかという点である。

『全体性と無限』の構成において、第二部の享受論は、顔との出会いをめぐる第三部の他者論につながる。渡名喜によれば、このつながりは単なる享受論から他者論への「乗り越え」ではなく、「つねに反転可能な表裏の関係」である。¹⁰⁾ たしかに享受によって私が分離した仕方で存在することは他者と出会うための必要条件であり、かつ、他者と出会ったからといって私の享受が全面的に停止することはない。そのようにレヴィナスは、享受論を他者論と並ぶものとして、二つの理論の関係を丹念に論じようとしていた。

では、フッサールの場合はどうだろうか。たしかに彼も、感性的なレベルでの享受を手放して肯定することはない。世界のなかの諸対象に惚れ込むことは生の重要な一契機だとしても、生の全てというわけではないのである。例えば本稿第二節で紹介した「本能的な行い」草稿の執筆直後の一九一七年から一八年にかけて、フッサールは「フィヒテの人間の理想」と題した講演のなかで次のように語っている。

実際のところ、感性界を絶対的現実と確信している素朴な独断論

者は、まさにこの確信ゆえに、実践の場面でも感性的人間になり、この地上の世界の奴隷になる。快樂と苦痛、欲望と享受のなかで、独断論者は常に地上の世界に関係づけられ、そこに依存している。そのような感性的人間として、独断論者は常に何かを欲しており、希望と恐怖とのあいだで翻弄され、ずっと浄福に至らないままである。(Hua. XXV, 279)

ここでの発言は、直接的にはフイヒテの思想の紹介である。しかし、感性で捉えられる世界が主観から独立にそれ自体で存在していると考える「素朴な」独断論者の姿は、フッサールが現象学的還元によって乗り越えようとしていた自然的態度における人間の姿と大きく重なる。さらにここでは、そうした態度が理論だけでなく実践にまで影響を及ぼし、感性的な快樂や享受だけを欲求するような「地上の世界の奴隷」を作り出してしまうとされる。そのような態度からの転換によってフイヒテが導こうとしていたのは、「浄福 (Seligkeit)」⁽¹⁾、すなわち「不変にして永遠なるものとの一致」⁽²⁾であった。

この講演が第一次世界大戦に赴く学生のために行われたものであったことを踏まえると、そこでのフッサールの発言は慎重な検討を要する。フイヒテとフッサールの立場を完全に重ねてよいかどうか、当該の状況下でフイヒテに言及することがいかなる意味を持つていたか——これらは稿をあらためて論じるべき問題だろう。少なくともここで指摘しておきたいことは、この時期のフッサールが感性的な水準での享受を論じるときには、それによって得られるのがかりそめの幸福でしかないというフイヒテの問題提起が念頭にあった可能性があるということだ。本稿第二節でも触れたように、この時期のフッサールは、「料理への切望 (die Sehnsucht nach der Speise)」やそれを味わうと

いう意味での「享受」について熱心に考察していた (Hua. XLII, 86)。その際に彼がそれらと対置させようとしていたのは、フイヒテが述べているような「永遠なるものへの切望 (die Sehnsucht nach dem Ewigen)」⁽³⁾やそれと一致するという意味での「享受」であったのかもしれない。フッサールの享受論は、さしあたりは感性的な水準の記述に取り組みつつも、それを土台として、「永遠なるもの」の水準へと上昇する可能性を持っているのである。

しかし最後に私見を述べるならば、フッサールの記述力の真骨頂は、食べ過ぎたり、散歩に行つて青空を眺めたり、不意にピアノが弾きたくなったりするような私たちの日々の有様を描くときに表れているように思われる。対象からの刺激に屈することが地上の世界の奴隷になることだとしても、やはり私は移ろいゆくものに愛着し、自ら進んでそれに没頭しながら生きている。フッサールの享受論を通して細やかに描き出されているのは、そのような人間の姿であった。

凡例

- ・フイヒテからの引用に際しては、バイエルン科学アカデミー全集 (Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften : GA) の巻数と頁数を示す。
- ・フッサールからの引用に際しては、『フッサール全集 (Husserliana : Hua)』の巻数と頁数を示す。

文献

- Ferrarello, Susi (2016), *Husserl's Ethics and Practical Intentionality*, London: Oxford; New York: New Delhi: Sydney: Bloomsbury USA Academic.
 Fichte, Johann Gottlieb (1995), *Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der*

- Wissenschaften, Band I/9: Werke 1806-1807, hrsg. von Hans Gliwitzky and Reinhard Lauth, Stuttgart-Bad Cannstatt: Frommann (邦訳) J.G. マーロン『淨福なる生への導き』、高橋亘訳／堀井泰明改訂・補訳、平凡社ライブラリー、二〇〇〇年。
- Hahn, Colin J. (2014), "Husserl's Concept of Personhood and the Fichte Lectures", in *Husserl und die klassische deutsche Philosophie*, ed. by Faustino Fabbianelli & Sebastian Luft, Dordrecht: Springer, pp. 299-310.
- Husserl, Edmund (1952), *Husserliana, Bd. IV: Ideen zu einer reinen Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, zweites Buch, hrsg. von Marly Biemel, Den Haag: M. Nijhoff. (邦訳) エドムント・フッサール『イデーン・II』、『イデーン・II』、立松弘幸ほか訳、みすず書房、二〇〇一・二〇〇九年。
- (1984), *Husserliana, Bd. XIX/2: Logische Untersuchungen, Zweiter Band, Zweiter Teil: Untersuchungen zur Phänomenologie und Theorie der Erkenntnis*, hrsg. von Ursula Panzer, Den Haag: M. Nijhoff.
- (1987), *Husserliana, Bd. XXV, Aufsätze und Vorträge (1911-1921)*, hrsg. von Thomas Nenon und Hans Reiner Sepp, Den Haag: M. Nijhoff.
- (2014), *Husserliana, Bd. XLII: Grenzprobleme der Phänomenologie: Analysen des Unbewusstseins und der Instinkte. Metaphysik. Späte Ethik*, hrsg. von Rochus Sowa und Thomas Vongehr, Dordrecht: Springer.
- Levinas, Emmanuel (2008), *Totalité et Infini. Essai sur l'extériorité*, édition « Le livre de poche », édition 11, Dordrecht: Boston: Kluwer Academic Publishers. (邦訳) エドムント・フッサール『全体性と無限』、藤岡俊博訳、講談社学術文庫、二〇一〇年。
- Nan-In Lee (1993), *Edmund Husserl's Phänomenologie der Instinkte*, Dordrecht: Boston: Kluwer Academic Publishers. (邦訳) ナン・リー『本能の現象学』、中村拓也訳、晃洋書房、二〇一七年。
- 渡名喜庸哲 (二〇二二) 『レヴィナスの企て——『全体性と無限』と「人間の多層性」』、勁草書房。
- 平石晃樹 (二〇二二) 『享受と傷——〈同〉の内なる〈他〉としての主体性をめぐって』、杉村靖彦・渡名喜庸哲・長坂真澄編『個と普遍——レヴィナス哲学の新たな広がり』所収、法政大学出版局、一九二二〇九頁。

注

- (1) Ferrarello は「こうした実践的活動を「実践的志向」として、とりわけ「空腹を感じる」という感情から「食事に行く」という実践へ至るプロセスに即して説明している (Ferrarello 2016, pp. 135-136)。なお「実践的志向」という語は、次節で紹介するフッサールの草稿にも登場する (Hua XLII, 87)。
- (2) ナン・リーによれば、フッサールの後期哲学においては、衝動の志向が「快さの (lustvolles)」に向けられ、それが与えられることによる「緊張の緩和 (Entspannung)」によって充実に至るという見解が提示され、同様の見解が知覚の志向の充実にまで拡張される (Lee 1993, p. 89)。これに対して本稿が主張したいのは、以下で述べるように、快さが衝動の充実に常に伴うとは限らないということである。
- (3) 『全体性と無限』のみならず『存在の彼方へ』の享受論にも目を向け、とりわけ後者の享受論を「傷つきやすさ」との関連で論じた研究として、平石二〇二二を参照。とりわけ本稿は、「苦痛は享受の対蹠点に見いだされるのではない。それは、ある意味では、享受ゆえに、享受そのものから、生じるのである」(平石二〇二二、一九九頁) という主張から多くを学んだ。
- (4) Levinas 2008, p. 112 / 藤岡訳一九一頁
- (5) Levinas 2008, p. 127 / 藤岡訳二一五頁
- (6) 特に『論理学研究』第二巻第五研究を参照。
- (7) Levinas 2008, p. 114 / 藤岡訳一九四頁
- (8) 「享受の対象 (objets de jouissance)」という語句は、例えば Levinas 2008, p. 112 / 藤岡訳一九二頁に登場する。
- (9) Levinas 2008, p. 114 / 藤岡訳一九三頁
- (10) 渡名喜二〇二二、三五五頁
- (11) GA I/9, 62 / 高橋訳三〇頁
- (12) フィヒテ講演をフッサールの思想展開の中に位置づけた研究としては Hahn 2014 を参照。ハーンによれば、フッサールは主観性が「実践的な本性」をもつという主張、および「本能的な衝動」のレベルから高次のレベルへの主観性の進展を説くという発想をフィヒテと共有している (Hahn 2014, p. 300, 305)。
- (13) GA I/9, 59 / 高橋訳二五頁